

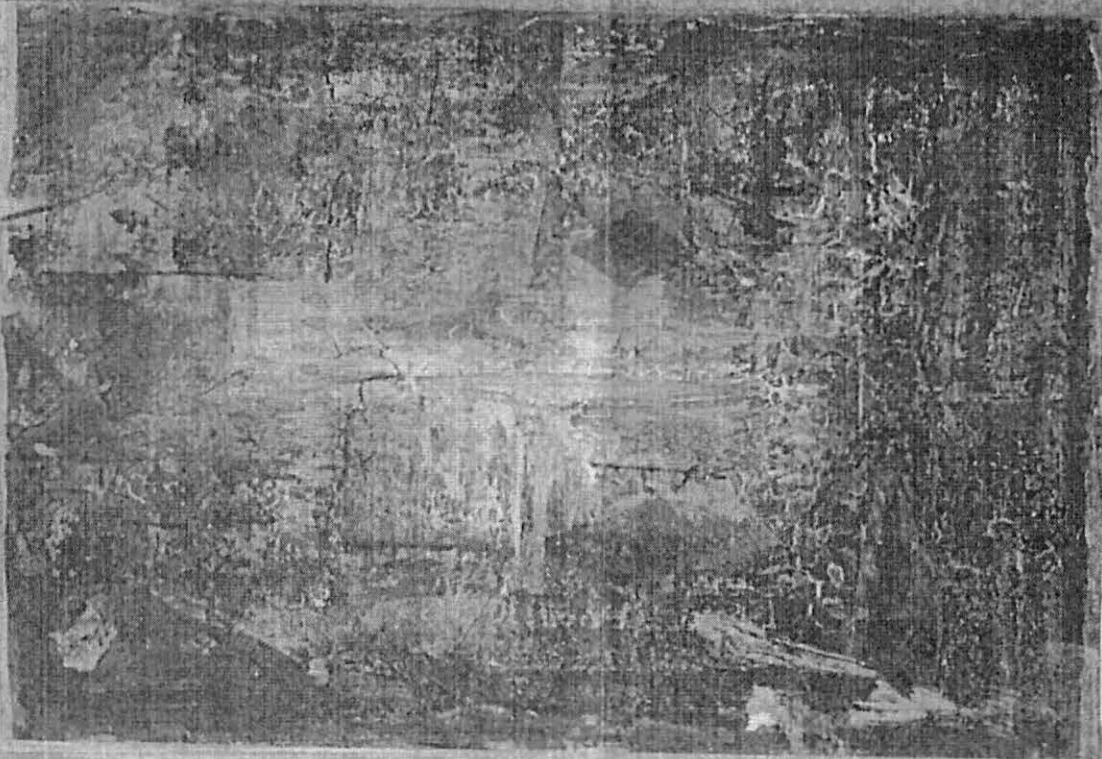
# tab

No.  
41

2  
0  
1  
4  
/  
03  
/  
15

後藤美和子／野村龍／長尾高弘  
福島敦子／秋川久紫／浅野言朗  
平井弘之／中村剛彦／木村和史  
倉田良成

梣 = *Machilus thunbergii*



ersterabend

AW 2014



詩篇

後藤美和子：有明／02

野村 龍：指／04

中村剛彦：割れ目／06

福島敦子：しづく／08

長尾高弘：クニ／10

浅野言朗：鳥の楽園／12

平井弘之：針金のはなし ほんとうの部屋／14

秋川久紫：喝采♪・ほか1篇／18

倉田良成：面影（山海物語集拾遺から）・ほか2篇／22

文

木村和史：自給自足生活／26

中村剛彦：象徴の魔力 七ノ一／30

あとがき集／34

画：和田彰

後藤美和子

## 有明

紅茶のカップを二つ並べ  
窓ぎわに置いておこう  
外からも見えるように  
週末には裏門で  
通行証を一枚もらおう

金の縁のカップにしよう  
バラの模様の、いつか入った  
喫茶店の海の絵の、避暑地の  
パラソルを、椰子の木を  
僕は知っていると云った

一番上の引き出しには  
夜明けが入っている

鯨の群れが

食されたことを忘れながら  
非常用の階段を泳いでいく

真下の海の画布に

唇を押し当てると光の輪がついて  
一度きりの続篇が始まる

(皆既食六八)

野村龍

## 指

優しい出入口に  
水が卵を生む

落花生から  
待つていた手紙が届き

夜更かしをすると  
蝙蝠が快感を盗んでいく

音楽が再生できるなら  
命をもう一度 振り出しに戻せないものか

映画は抉られた  
寒さを 握り潰せ

蝶を追って走る

光に書き込まれた 約束を読む

意味に罅が入る

種のなかで 魂が目を覚ます

時計を飲み込む

雪が 輝き始める

羚羊が来るから

瞳を よく洗っておきなさい

中村剛彦

## 割れ目

あの人が私を殴りはじめてから

私は感じなくなりました

あのお強く、お優しく、お狂いになるあの人が

私から女を奪ったのです

私はただの割れ目になりました

それでもあの人の子を授かり母親として生きてきました

それで十分な人生でした

いまもあの人の太陽のような灼熱の肉棒を憎んでいます

なぜなら私以外のすべての女を犯しつづけているからです

ああできたならあれを私の割れ目で凍らしたい

でもきつとあの人の優しいお狂いが私を燃やしてしまう

私はあの人を愛しているのです

あの人が死んだらきつと、きつと、男たちはこの国から消えてしまうわ

この国の男たちはすべてあの人に恋しているから

あの無限の、宇宙大の、全ての星辰を抱くお瞳のなかで

男たちは輝くことを望んでいる

女はけっしてあの御宇宙へは入れない

女は泥の川に流されるだけ

でもきつと私の子は、あの人の血を引いた私の子は

女に恋することができるとしよう

なぜなら私はずつとあの子を私の割れ目で包み育てたから

もうすぐあの子の上で少女たちは悦び、跳ねるわ

あの子の肉棒は私の聖水に満ち溢れている

私はもうすぐ死にます

あの人を殺して

男たちを滅ぼして

あの子の純血のために

あの子を求める少女たちのために

私はもうすぐ祈りはじめます

福島敦子

しづく

病気となんか闘うんじゃないか  
と思っけれど

そうするしかなかった

父はまだ闘っている

人が死んだ話を聞けば

いけないことだと思っけれど  
どうやらやましかった

どこまで闘い続けて

どこいらであきらめればいいの

お父ちゃんは極楽浄土に行けるから  
安心して

って言うとう首を横に振る

じゃあ 永遠に生きるの

って聞くと

首を横に振る

もう 言葉じゃない  
黙っていよう

冬の日差しが病室にすつと差し込んでくる

あのひとすじのひかり

あのひかりのしずくを

何も飲めない父に

飲ませてあげたい

苦しむ人に

何の信仰がなくても

## 長尾高弘

### クニ

父の両親は

香川の島の出身と福井の山奥の出身で  
横浜で仕事をしていたらしい。

母の両親は

都下八王子の出身と新潟の南魚沼の出身で  
兵庫の西宮で店を開いていたらしい。

らしいというのは、

私が生まれた頃にはもう母方の祖母しかいなかったからで、  
今のは全部親からの又聞きだからだ。

正確でしょ？

二人の祖父はそれぞれちよつと成功したが、  
その成功は長続きしなかったらしい。

つまり、二度追われたのだ。

父はほぼ標準語でしゃべり、

横浜の思い出話をした。

母は関西弁の混ざった標準語でしゃべり、

西宮の思い出話をした。

私はその両親から千葉の柏で生まれた。

私はほぼ標準語でしゃべり、

千葉に方言があるのかどうか、

よく知らない。

今はどうしたものか横浜にいる。

親子といっても、

異国人のようなものだな。

祖父と祖母たちは、

同じ土地の親から生まれたようだけど。

浅野言朗

## 鳥の楽園

誰もが 落ちていた鳥を拾い上げずにはられない

抱きかかえて埋める場所を探している

公園は三角形に折り畳まれようとしていたから

巻き上げられそうな隅の砂場に埋めてみる

吹きこぼれた砂が遺骨のように笑った

砂に埋めた鳥であつても 飛ぶことを忘れない

公園は 朝までにごこかに飛んで行く

寄り道……校舎の屋上に砂場を置き忘れる

校舎の窓を叩く優しい風の 数え方を忘れる と

死んだ鳥の数だけの 不可解な浮かび は終わる

鳥の痕跡を消すために 隠し忘れた朝を

再び数え始める手がかりが 見付からなかった

街外れの墓地に 鳥も一緒に埋葬することにしよう

すると 翌朝には 墓地はどこかに消えていた

平井弘之

針金のはなし ほんとうの部屋

ふすまは眠っている

ふすまには書が貼られてある

あたしは起きていた

ここはほんとうの部屋なのだ

ほんとうの部屋で生まれて

ほんとうのあなたをつれて来た

なんだか胸が痛い

チャアリの気まぐれにつきあつて

バスに乗って海岸線の風にあたつたからかな

このふすまのデザインはだれの趣味？

黒い漢字がいっぱい

四方はすべて開け放たれる

壁なのか扉なのかが分からない

ほんとうの家のほんとうの部屋で

あたしはまるで東北のアリスになったよう

あの岬の先に鳥たちがいきいきと鳴きながら落ちてゆく  
水面を覆う黒い虹のオイルのように

ため息またため息のあなた

愛のレッスンはもう終わりなの

じゃああたしは姉さんの部屋に行ってくる

蛍光の無菌の廊下をすこしばかり抜けて

姉さんは待っていてこゝろと背中をさすってくれる

あなたについてあたしが説明したことが

青く霞んだ大陸の名前であるのか

こゝろはほんとうの部屋の古い家具のなか

「よし」なんて思つて立ち上がったりは

けつしてしない

一本のねじ切れない針金が

いつの間にか

ほんとうのあなたに投げられた

この囚われの暗い家具たちがあたしに屈伸を誘う

いつの間にか

一輪の乾燥した薔薇の黄色が眼をこする  
あたしはずっと起きていたのだよ

ほんとうのあなたは

いつまで眼をつむっているのか

翌朝チャアライは

あたしたちのコトバのみなもと

歩こうとしている無数の黒い動作

その無限のふすまをあたしに開けさせた

黒い動作は飛び立った

板の間に眠る眼が触る／触らない

引き出しの重い突起が陰る／陰らない

東京に電話をしなきやと云って

その振りをする

なかなか短い時間内では巧くゆかないみたいだけれど  
半身が汗ばんでくるまでやっているのほっておいた

あたしのからだには致命的な緑色の傷があり

あたしのこゝろにはほんとうのあなたがいた

あなたの顎の短いひげや

早朝の歩道橋のようにあたしは楽しんでいた  
そのはずだった

鳥たちはそこを渡ってくるのだ

ふすまから飛び立ったほんとうの動作だった

あなたには聴こえるのかな

あいつらの呼ぶ聲が

ほんとうのからだへと渦巻く応答に

一本の針金が絡んでくる微かなうねりが

\* 「第1052回詩人の聲」で朗唱した『針金のはなし』（2000年、詩集「管くだ」より）を改作した。

秋川久紫

喝采♪ (1972年)

いつものように濱を行き

戒の歌 謳う私に

寄せ来る白波

暗い観念が 揺れました

若き日の躰き 止める術もない出来事

指を欺くトリガー 倒れた人影

一輪の華 握り締め

境界の在処を探して

至福の眠りに

就いてみせるから 見届けて

旗がたなびく空を恋い

銃声の祈りに倣って

裸の私は

朽ちることばかり求めてた

狭いアトリエには 赤い絵の具だけが散つて  
筆を嘲る果実 反転の時計

幕間まくあいの夢 抜け出して

日輪の翳りに照らされ

折れない心で

今日も戒の画を 描いてる

〔原詞…吉田 旺〕

〔作曲…中村泰士〕

## ひと夏の経験♪（1974年）

あなたに女の子と語らう

華やぎの闇をあげるわ

微かな愁いの光に換え

華やぎの闇をあげるわ

慎ましさから 激しさへと

替わる刻ならば

砕けてもいい 溶けてもいい

受け止めてあげる

誰しも深みへと 誘いざなわれてゆく

灼熱の昏い夏

あなたに女の子と学べる

華やぎの闇をあげるわ

らせんの階段駆け降りたら

華やぎの闇をあげるわ

吐息のリズム 合わせるため  
奔って来たのよ

尽くしてもいい 棄ててもいい  
それで構わない

誰しも痛みから 逃れる術なき  
忘却の淡い夏

〔原詞…千家和也〕

〔作曲…都倉俊一〕

倉田良成

## 春一番

西のほうの空が暗い

そっちのほうへひかれていくんだと思う  
くもはわれて

きんいろの夕日がるしゅつしている

あっちのほうになにかがあるのか

ほんとうにあるのか？

工場と海はぎらぎらとひかって

ぼうしや、鍵や、せんたくものがふきとばされる

きんきゅうでもないのに

けいさつの赤ランプがぐるぐるとまわる

ぼくはラムネを食べすぎて

まりみたいにふくらんで

きょうふのひょうじょうでとおくまでとばされる

ぼくは水ぬるむカエル

みたいにつぶされた赤い一個のしんぞうです

西のほうの空が暗い

ぼくは雨のかおをしたまどわくの  
傘をもたないしょうねんです

あの暗い空のしたからやって来た  
つぶされた赤い一個のカエルです

## 扉

かべにかかった絵には

夏のはらがかがやいている

それはせかいをのぞく窓だ

たとえ窓のそこにあるのがほんとうは

はいろいろのビルだとしても

ぎんいろにぶくひかるきよだい鉄塔だとしても

それはほんとうのせかいではない

それはにせの絵にすぎない

ある日ぼくらはいすから立ちあがる

そしてあるいて戸口まで行き

ドアをあける

そこからひろがるのはかたむいた像のくびや

はしただけのこった神殿

それらがかがやく夏ののはらのなかで

かぜに吹かれていたんだ

せかいは思い出ににて

だけれども、ぼくらこそせかに思い出されているんだろう

はてしなくあおいおおぞらの迷路のそこで

ぼくらは いま

おそろしくじゆうだ

## 面影

せんがい  
山海物語集拾遺から

むかし、或る地方都市に隠れ住んでいたころ、その世過ぎに運送トラックの助手のようなことをして生計の一部を立てていたことがある。仕事は基本的に重労働の部類に属するけれど、ときたま驚くほど楽で割のよい業務も交じって、おおむねが暢気な日々であった。とりわけて長距離の場所への搬入の場合、仕事が終われば運転手も私も気楽な一種のドライブ気分であったが、こういうとき、倉庫に帰るのはたいてい夜半に至った。帰りはだいたい決まった道をたどるので、行き会う風景もほぼ同じである。ほとんど一瞬で通り過ぎるのでそれまでは気づかなかつたが、あるとき三叉路の島のようになっている空き地に、何やらたくさんのヒトガタのような立像がひしめき合つて並んでいるのを目撃した。それは夜目にもあきらかに墓地の一区劃と理解された。そこに、軍服を着て、ある者は鉄兜を被り、ある者は兵隊帽で、軍刀や剣付き銃を持ち、みなゲートルを巻いた足で直立している。彼らはぜんぶセメント製のものだ、と思つたとき、不意に寒さが

やうて来た。なぜなら彼らの目はかつと開いているが、そこにはギリシア彫刻のように瞳がない。月光を浴びた白目ばかりがある。考えてみればそこいら一帯は平和公園と名づけられた広大な墓苑で、その極致ともいえるいちばん端に立像のひしめきがむらがり顕っているのだ。彼らは先の日中戦争における最初の作戦で、おびただしく出た戦死者の一部であるらしい。僧侶を呼んで盛大に鎮魂のこともしたそうだが、鎮められない気は触覚的にさえ存在して、こういうモノが三叉路の中心にあるということの意味を、いささか重篤に考えざるをえない。その後、地方都市としては大きいこの街から、立像群はもつと南の小さな町の寺院に移されたという。その数九十体余。地方といえど発展しつつあるこの大きな街の真中に置いておくには、やや憚りが出てきたからなのかと疑わざるを得ない。これとは規模において比較にならないが、現在私が居住する場所の近くに一つの神社がある。このあたりを散策するついでに、よく立ち寄って境内で休んだりもしたのだが、この神社の本殿脇にまた小さな鳥居があつて、末社かと思つて行つてみると大きな掲示板のような立て板がある。そこに貼り付けられてあるのは古いモノクロ写真百葉余。上方に、属する村名と氏名がそれぞれ記されてある。これらは先の十五年戦争における、このあたりの戦死者三百数十柱を祀つたものであり、なかに目につくのは女性の写真もあつたことだ。現在で言う野戦看護婦のような役割が考えられるが、それにしてもぜんぶで三万人と少しのこれら村落人口の、それも若者ばかり三百数十という数は、あらためて考えても尋常なものではない。これら時を経て褪せし、雨に濡れまた乾き、ついには捲れ腐爛したようにさえ見える百葉を超える写真のさまを見て、私の肌はぞつと粟立ち、うらうらとした五月の木陰で凍りつくものを覚えた。ふとかえりみれば、わが魂もさらに深い深い悲しみの水に浸されているのだけれども。

うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき

小野小町

木村和史

## 自給自足生活

家づくりを開始した6年前は、家をつくることしか考えていなかった。変わりやすい天氣に神経をとがらせながら作業に没頭していた、あの頃のわたしが懐かしい。

意気込みはあり余るほどあったが、なにしろテント暮らしだし、寒さ暑さだけじゃなく、鳥の鳴き声、朝日の眩しさまで身にしみるし、買物物は遠いし、軽トラであちこち走り回って、今思うとずいぶん無駄な動きと出費を重ねていた。3年で主屋を棟上げまで持つていくつもりだったので、やみくもに突っ走る感じになってしまったのは仕方がないとしても、雨の日でも炊事、洗濯などができる小さな家を最初につくっておけば、はるかに楽で効率的な作業が進められたと思う。そのつもりで長野の友人に、10日でできるツーバイフォーの小屋の作り方を実践で教わってきたのに、

伝統工法にこだわってしまったがために、せっかくの教えを役立てることができなかつた。建築現場には飯場というものがある。飯場という言葉を知っていても、その真のありがたみが分かっていないのでは、言葉じたいを知らないにひとしい。

原野に大きな家を建てようとする素人大工はまず最初に小さな飯場を建てるべし。今となつてはもう遅いが、次回は必ずそうしたい。それにしても、ずいぶん時間がかかっている。今年で7年目になるのに、小屋だけが建っていて、主屋はまだ影も形も見えない。今年は絶対に棟上げまでこぎつけたいといかないのだが、意気込みはあきらかに低空飛行だ。入院している父に変化があったら、軽トラで4時間以上かかる帯広まで駆けつけたいといけないし、ひどく怒りっぽくなること

ある母の精神的ケアも必要だ。いつでも店じまいができるように建築現場を管理する必要がある。ブレーキをかけながら走っているようなものかも知れない。6年前の勢いで走り続けることができていたら、おそらく今の現場はまったく違ったものになっていたのではないだろうか。いつのまにか、小屋をつくっては軒下に下屋を張り出す、小さく小さく継ぎ足す工法がわたしの家づくりになってしまった。「もうひとつ下屋をつくると、木村さん、頭がぶつかっちゃうよ」と友人にからかわれながら。

はたして主屋が完成する日は、本当に来るのだろうか。最近では、早く早くと急かす友人たちの声も小さくなっているような気がする。わたしの事情を理解してくれたというより、おそらく匙を投げられたのだろう。それでも、幾つか建てた面白そうな小屋を見て、ここでもう十分暮らせるんじゃないの？と半分本気で言ってくれる友人もいて、わたしも半分本気でそう思ったりする。

家と暮らしはセットになってるのが普通だと思うが、わたしの場合は暮らしをがらから引きずりながら、家という建物を目指している感じだ。そして、飯場はつくらなかつたけれども、不便を少しづつ改良しながら何年も寝泊まり小屋での生活を続けているあいだに、どうやらわたしはもうこのれつきとした住人になってしまったようだ。近所の立派な家の人たちと同じように、氷点下20度のこの冬を越して、なんとか暮らせているのである。

年齢や体力を考えると、主屋を完成させることに執着するより、自然農法の研究をしたり、山で木を伐って薪をつくり、椎茸も栽培して、家具も作ってなど、暮らしそのものを優先させる生活にすぐにでも入った方がいいのかも知れない。

時間がかかっているあいだに、いろんなことがあった。いろんなことがあって、時間がかかっている。でも、それが人生。6年間生きていけば、平穩無事な方が不思議だ。

「まっすぐ進むことはできていないが、遅れているがゆえに見えてきたこともある。不便だらけの生活がほんの少し便利になると、暮らしがぐんと楽になる。そのための作業に気をとられ過ぎると本体工事が進まなくなるので、仕事の合間に後ろめたさを感じながらぼつりぼつりとそんな作業を混ぜていく。これが積み重なっていくと、暮らしそのものの輪郭が徐々に現れてくる。主屋の完成はまだ遠いが、暮らしが完成に近づいてくるのである。

自給自足生活を考えるようになったのは、家づくりに時間がかかり過ぎて老後の資金が危機的状况になってしまったことが大きい。ほかにも理由がある。ずっと頭が上がらない女房から経済的に自立して、頭があがるようになりたいと思つたこと、お金がなくてもかなり暮らしていけそうな手応えをつかんだことが、自活の方向へわたしの思いを膨らませていった。

畑があるし、山もある。基盤づくりはすべて女房のおかげで、この点では頭があがらな

い状態がこれからも続きそうだが、基盤は女房のものでもあるので、わたしが略奪したところにはならないだろう。おそろく、基盤の活用の仕方を隣人の、普通の生活をした女房にわたしが教えることになると思う。実際は教えることより先に、わたし自身がわたしの生き方をこの地でどれだけ貫いていけるか、実践がすべてになる。

お金が無いからとか、お金が足りないからではなく、お金というものは存在しないと考へたらどんな生活が始まるか。不安も大きい、楽しみもいっぱいなのである。

長いこと本棚に置きっぱなしだった、内山節の『貨幣の思想史』—お金について考えた人びと—、という本を読んでみた。64歳になつて初めてお金とはなにかを考えるのは情けないけれども、必要になつたときに初めて必要な勉強をするのがわたしの自然な方法になつていたので仕方がない。

畑のニンジンを掘ってきて、洗って、晩飯に煮込んで食べる。このニンジンのわたしに

とつての価値を、経済学では使用価値と言ふらしい。この価値の豊かさを理論の中になんとか組み込もうとしてギブアップしていく過程が、今に至る経済学の歴史のようだ。貨幣に敗北するのである。しかしたとえ経済学者たちがギブアップしても、使用価値は豊かなまま存在しているのだから、それを利用しない手はない。「使用価値は関係的価値であり、それとどのような関係を取り結ぶかによつて、つまり使用価値を成立させる交通のあり方によつて、どのようなでも変わってしまうのである」とも内山は書いてある。この考えは西洋的思考方法への批判であり、内山の里山へ向かう根拠でもあるようだ。

ニンジンの使用価値というのは、朝食に食べられるか夕食に食べられるかによつて変化し、わたしの体が求めているかそうでないかとか、子供に食べさせた場合とか、食料に不自由している隣人にあげた場合とかによつて変幻自在の価値を持つ。自給自足生活において、一本50円というニンジンの価値はないの

である。自分で自由に価値を決められる、社会のしきたりや国家の繁栄など考えない自分勝手な生き方といえないこともない。しかし、「：資本制商品経済の秩序は、使用価値や人々の豊かさのことなど念頭に置いていないのである。：」から、どっちもどっちといえる。わたしは人々のひとりだから、わたしの豊かさを念頭に置いてくれる暮らしを選択したい。

いつか、国家や世界の経済と使用価値が仲むつまじく暮らせる日がくれば、わたしは多分、よろこんで国家に服従するだろう。

お金と紙くずの舞う競馬場が大好きなわたしは、お金と縁を切れるかどうか大変な試練ではあるけれども、ここ一、二年の実習期間ではうまくやり過ごせているので、なんとかなると思う。生きることのみを暮らしの理想にできたらどんなにすばらしいだろう。暮らしそのものをあれこれ考えていると、きりがなく夢が膨らむ。

中村剛彦

## 象徴の魔力七ノ一

聖燈　ゲイブリエル・ロゼツティ　蒲原有明訳

深き眞晝をフランドルの鄙の路のべ、  
いつきたる小き龕ほくらの傍へ過ぎ  
窺へば懸け聯ねたる晝あひの中に、  
聖母は御子の寝すがたを擁いだきたまへり。  
羊を飼へる少女をとめらは羊さし措き、  
晴れし日の謝恩やここにひざまづく、  
はたや日の夕ゆふべもここにひざまづく、  
悲しき宿世すくせ泣きなむも、はたまたここに。

夜も更けしをり、同じ路、同じ龕の  
かたへ過ぎ、見ればみ燈あかりほのめきて  
如法の闇の寂しさを耀あやき映す、  
かくも命の慄めくみ冷え、疑ひ胸に  
燻る時、「信」のひかりをひたぶるに

頼め、その影、あるは滅きえ、あるは照らさで。

これまで蒲原有明の象徴詩における宗教性を論じる場合、特に仏教の影響については触れた。一方キリスト教についてはどうかは、以前、「伝へ聞く彼の切支丹、古の悩みもかくや——」ではじまる『有明集』所収「苦惱」の、「絶体絶命の性欲」によるキリスト教倫理からの逸脱について触れたのみで、あまり思考してこなかった。確かに有明がカトリック信者であった乳母に育てられたことや、明治期の同時代性として、北村透谷、島崎藤村ら近代詩黎明期を支えた詩人たちへのキリスト教の影響を考えれば、有明もキリスト教と無縁でいられるわけではない。しかし透谷ら「浪漫主義者」とは一線を画した有明

の象徴の暗黒界には、キリスト教的原罪意識では捉えきれない、永遠の輪廻転生の渦がどこまでも巻かれていることがまず第一に重要であった。

しかし、いま一度その詩業全体を眺めると、果たしてそう安易に断じることができるとどうか見直さざるを得ない。なぜなら詩人が生涯に涉つて敬愛し訳出しつづけたのが、十九世紀産業革命以降の物質社会化がすすむ英国において、原始キリスト教回帰を強く打ち出した「ラファエル前派」の詩人、ダンテ・ガブリエル・ロセッティ（一八二八—一八八二）であり、その「原理主義的」とも言える思想への理解抜きに、有明がただキリスト教世界の「薫染」だけを詩語に移入したというのは、有明の「象徴」についてどうしても踏み込みが甘いと言えないからである。そしてこのことは、有明象徴詩が齎した日本の詩における革命性の巨大さを考えるとき、「日本語の詩語」へのキリスト教の深い浸透度を再度捉え直さなければならぬことを意味し

ている。

そこでまず、冒頭に引用した「聖燈」について語るならば、これは数年前に私が鎌倉の古書店で入手した『近代英米詩集』（日夏耿之介編、小山文庫、昭和二十四年）に収められている一篇である。その他のロセッティ訳は「眞晝」、「天津郎女」があり、日夏耿之介訳「肉性美」、上田敏訳「小曲」等もある。また鷗外訳バイロンや、逍遙訳シェイクスピアなど、いわば明治期に行われた英米詩の訳業が詰まっている。これが第二次大戦後わずか四年後に出されたことは、米国による占領政策に基づく英米文学の復興の気運が背景にあるだろうが、当時の有明自身はといえば、前に述べたように詩壇からは忘却された存在となり、すでに最晩年期の仏道へと至り、このアンソロジーの三年後の昭和二十七年、七十七歳で世を去っている。

果たしてこの詩「聖燈」を含めたロセッティの訳詩が戦後どのように受け止められたか。もともとこの詩は、ロセッティ訳の日本

における初期のひとつで、明治三十年代に有明によってなされたものである（谷田博幸『唯美主義とジャパニズム』名古屋大学出版会、二〇〇四、参照）。詩壇においては、「荒地」らの戦前のモダニズム系から連なる「戦後詩」がはじまっていた時代であるから、およそ懐古趣味以外の何ものでもなかったに違いない。

しかし別の角度で捉えるならば、戦争期に禁止されていた欧米文学の戦後の再輸入（再編成）は、そのキリスト教精神の再輸入（再編成）という二重の意味を持ち、焼け野原となった戦後日本におけるその「救済」理念は、戦前に増して強く人々の心を掴んだと思われる。たとえば遠藤周作はじめとする戦後カトリック作家が本格的に活躍した背景として、「戦争」の悲惨の体験が「原罪」意識とともに強く人々に根付いていたことは、言うに及ばない。この有明訳「聖燈」におけるキリスト教の光明の「晝」も、戦後日本では明治期とは別の意味での「救済」として受け取られ

た可能性は高い。類型として戦後に流行した立原道造の詩作品が湛える中世キリスト教的美的世界もまた、戦争で傷ついた人々の心の安寧をもたらしたものとと言える（なお詩「聖燈」を含めた多くのロセツテイのソネットを明治期に蒲原有明は実に周到に翻訳し、自作ソネットにも応用しているが、昭和初期における立原道造のソネットへの繋がりは、単なる「形式」性にとどまらない、キリスト教精神の詩的継承として引き継がれているものといえる。これについては後述する）。

しかし注意しなければならぬ。詩「聖燈」をよく読むならば、これは単なる「救済」の詩ではない。一連オクテット（起句八行）までの「眞晝」の光の世界は、二連セステット（結句六行）では暗転した「如法の闇」である。「かくも命の慍み冷え、疑ひ胸に／燻る時、「信」のひかりをひたぶるに／頼め、その影、あるは滅え、あるは照らさで」と、むしろ信仰への疑念が現れてくる。この光と闇のコントラストは、ソネットの構造的特徴で

あるだけでなく、「同じ竈」Ⅱ「同じ精神」内における近代人の信仰と非信仰の矛盾構造を示す。有明はおそらく、この口セツテイの近代精神の分裂状態を我がものとして感得していたはずである。あの「肉」と「霊」の分裂しかり。この分裂の溝から、朦朧たる「暗黒」の象徴詩語は発せられたのである。

有明が「近代芸術家中異常性格者の随一」

(「象徴主義の移入について」とした本家口セツテイはこの分裂を縫合させることなく狂気に陥り、有明は仏教思想によつて救われたと今は見るが、それは今後より詰めてみなければならぬ。何より現代を生きる私が蒲原有明の象徴詩に引かれるのは必然、私の内部の「肉」と「霊」の分裂、キリスト教的倫理観とそれへの懐疑が同時に張り付いていることの証左であると意識せずにはいられない。前回オウム事件への関心を書いたが、「詩と宗教」の分ち難い結び目を見つめることはもはや避けて通れない。次号ではさらに口セツテイと蒲原有明が背負った「近代キリスト教

精神」と「詩」とは何か、現代詩は果たしてそれを超克しているのか、考えてみたい。

## confidence

アラゴンの初期の詩を読んでいたら、「アルメニア紙」というのが出てきた。何だろうと調べたら、アマゾンで500円で売っていたので買ってみたところ、小さな冊子になっていて、昔の回数券みたいにちぎって使う紙のお香だった。メラメラ燃えるのが面白くて、すっかり火遊び気分である。(後藤)

たまたま飼うことになった野良猫に翻弄されている。一匹は去勢手術に連れていく途中で逃げられ、もう一匹は肺に大きな影があつて病院通い。近所の猫が喧嘩にくるので、夕方から小屋の戸を閉めたり、留守にするときは、餌の量の計算とか。寝床はコンパネに断熱材を張って作り、電球で保温。野良のまま飼うつもりが、予想外の手間。これも縁だから、と近所の人に言われ

る。(木村)

消費税の関係だろうか、最近、街中にやたらと工事現場が目につく。建っていた家を取り壊して、新しい家その敷地の中に嵌め込まれていく。古い家こそがその街に馴染んでいたと思われて、新しい家はその街に相応しくないように感じられる。けれども不思議なことに、しばらく経つと、古い家のことはうまく思い出せない。だから街並とは、思い出せない遺失物の集積のようなものだ。(浅野)

「オーディオ」は、普通の趣味だと思つていました。ところが現実はそうではないらしく、今、オーディオを趣味として楽しんでいるのは、かなりの物好きに限られるらしいのです。言われてみれば、オーディオ

に関する書籍は殆ど皆無、情報収集のための雑誌はいずれも季刊です。今、「業界」は、PCオーディオのブームに力を借りて、新しく生まれ変わろうと必死になっています。私などは数万円のコンバータを買うのに四苦八苦していますが、昨年、とある「超」マニア向けのオーディオ誌で賞を取ったのは、1本（2本ではありませんよ）2300万円のスピーカでした。このスピーカ、一体どう言う方が買うのでしょうか？（野村）

胃ろうをした父は類天疱瘡になり背中一面に黒い斑点ができました。そのさまはあまりにも哀しく斑点を見るたびに薔薇の葉っぱの黒点病を思い出しました。薔薇の好きな父がだんだん薔薇に似てきた：などと妙なことを考えていました。（福島）

佐村河内守の事件で、自分が一番嫌だっ

たのは、別に障害者であることとセットで彼（正確にいうなら、新垣隆）の音楽を受け容れていた訳ではなかったにもかかわらず、結果的にその「セット商品を買って欺された側」に自分がいるような気がして来て、何だかとても居心地が悪くなってしまうことだ。さらに言えば、仮に「作曲者が誰であれ、良いものは良いのであって、音楽に罪はない」と言い張ったとしても、今となつては「欺された側にいる者の負け惜しみ」くらいにしか聞こえないかも知れない、ということだ。この状況下で、「自分は別に欺された訳ではないので、特に怒りを感じない」と言ってみたり、一連の音楽が社会的に抹殺されつつあることに異を唱えてみたりするには、多分、とても勇気がいる。（秋川）

二月の大雪のとき、数年庭に住みついている野良猫家族三匹のうち、子供一匹が大

怪我をした。右頬が骨が見えるほど削げてしまったのである。大雪だから獣医に連れていくこともできず、何を与えても口にせず日に日に衰弱していった。その子は私の犬ボニーの親友でもあり、ボニーも心配そうに外にいるときははずと側にいた。雪も溶けはじめて、獣医に連れていったら頬だけでなく、その傷で繁殖した細菌が肺に入り肺炎を引き起こし、胸に大量の膿が溜まっていた。助かるか分からないとのことだったが、懸命に治療をしてくれ、結果、しばらくの入院後、無事帰って来た。削げた頬は痛々しいが、その子の親兄弟と仲良くいまは丸くなつて寝ている。ボニーとも以前と変わらずじゃれて遊んでいる。もうすぐ暖かい春が来る。(中村)

相変わらずのーたりんの私は先日営業の勤務先でこう云った、一生友だちとして仕事をしよこう云つていたくせに、

入院中見舞いにも来なかつた、こんど会つたらぶつ飛ばしてやる。その人と先日結局呑みに行くことになった。二年ぶりの再会であつたが楽しく呑んだ。相も変わらずのーたりんな私は営業上のうまく付き合えぬ人の悪口など発散しながら問題は人のころでしよ、などときいた風な口ぶりで呑み続けた。今でも見舞いに行かなかつた事を根に持っているのかと云うので、ああ持つてますよ、でももつとなんだかなあと思つた奴もいるし、などとのーたりん一直線。近しい人が癌で亡くなつたこともあつて君を見舞いについて頑張れなどとはとても云える心境ではなかつた、と云う話になつて私は言い訳のようにも聞こえたのだが、まあその話はもう止めましようと言ふことになつた。俺はほんとうに君に会つたらぶつ飛ばされれると思つていたんだよと酔つて五回も云う彼は営業付き合ひの人のなかで、本音で語れる数少ない人なのであ

る。ただ、私の詩は読まない。(平井)

本を減らすために、ドキュメントスキャナーと断裁機を買い込んだ。本を切るのは快感だ。でも、なかなか減らないな。『CDも手持ちの分だけだがPDFに流し込んだ。』  
<http://longtail.co.jp/tab/> で見られるようになっていたのでご覧ください。(長尾)

クラウディオ・アバドが死んだ。ルツェルンでの最晩年の演奏は、もはやひとつの宗教だ、といわれたように、たしかに「光」がそこにあった。

erstebent は、グスタフ・マーラー作曲、交響曲第9番最終小節に見える書き込み。  
「死に絶えるように」。(和田)

大雪に凍えうずくまる二月が過ぎて、気がつくとも梅花が満開となっている。この季節が来ると道元の次の法語などが思い起こ

される。曰く、《天上の天花、天雨曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華および十方無尽国土の諸花は、みな雪裏梅花の眷属なり。梅花の恩徳分をうけて花開せるがゆゑに、百億花は梅花の眷属なり、小梅花と称すべし》。もとより梅花、ことに白梅花を鍾愛するのは、道元や曹洞宗の専売ではなく、臨済禅もいたく好むところのものだが、毎年この時季、向こうの空が透けて見えるような満開の梅花と、清んだ香りに行き合うと、どことなく止観の想いにいざなわれると言ったら笑われるだろうか。この点が桜のあのもの狂おしいまでの満開とは決定的に異なるのだ。気候も次第に極端なものとなってきたが、少なくともまだ若い春のこのときだけは昔が息を吹き返すようである。(倉田)

tab 第41号 / 2014年3月15日

編集発行人 / 倉田良成

〒230・0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ201

メールアドレス / [katei:511@k3.dion.ne.jp](mailto:katei:511@k3.dion.ne.jp)